

雜賀柳香著

十三
年
の
批
評
の
巖
間
堀
の
紅
楓
冬
夕
月
榮
初
編

梅堂國政画

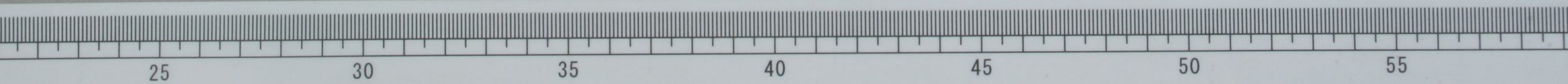
元田彫

假名垣魯文閱

金松堂壽梓

中

下





假名垣魯文閣

20

25

30

35

4522
1

冬 初編 夢文園
解 又 上 椿 梅香著
月 又 茶 春 國愛画



金松 椿

<48-8318>

怨恨子孫と相繼者の蓋報讐の私事にして宿意子孫は止可
らざる。此と晴らまは公法何う然と共父討てられ其子公法の順
序を待たば曲直道と分らざる。孝子の血氣我日本魂の切なる
者にて。鬱憤已と得ざるは出る。時の明治の開進世界も俱不
載天の道一筋。十三年の仇嵐今吹返を白井が本懐汐留河岸の
一の瀬に散布楓の韓紅ひの我社の雑賀が旧識に係る因縁の
福岡縣士逸くも筆と取敢む。該顛末を慰て。梅の浪華津い
ろはよ記し。其畧歴と引延を前後二帙の讀切への玉の
砥磨き出さ。柳香物の一部よとそ

明治十四年第一月

假名垣魯文序誌







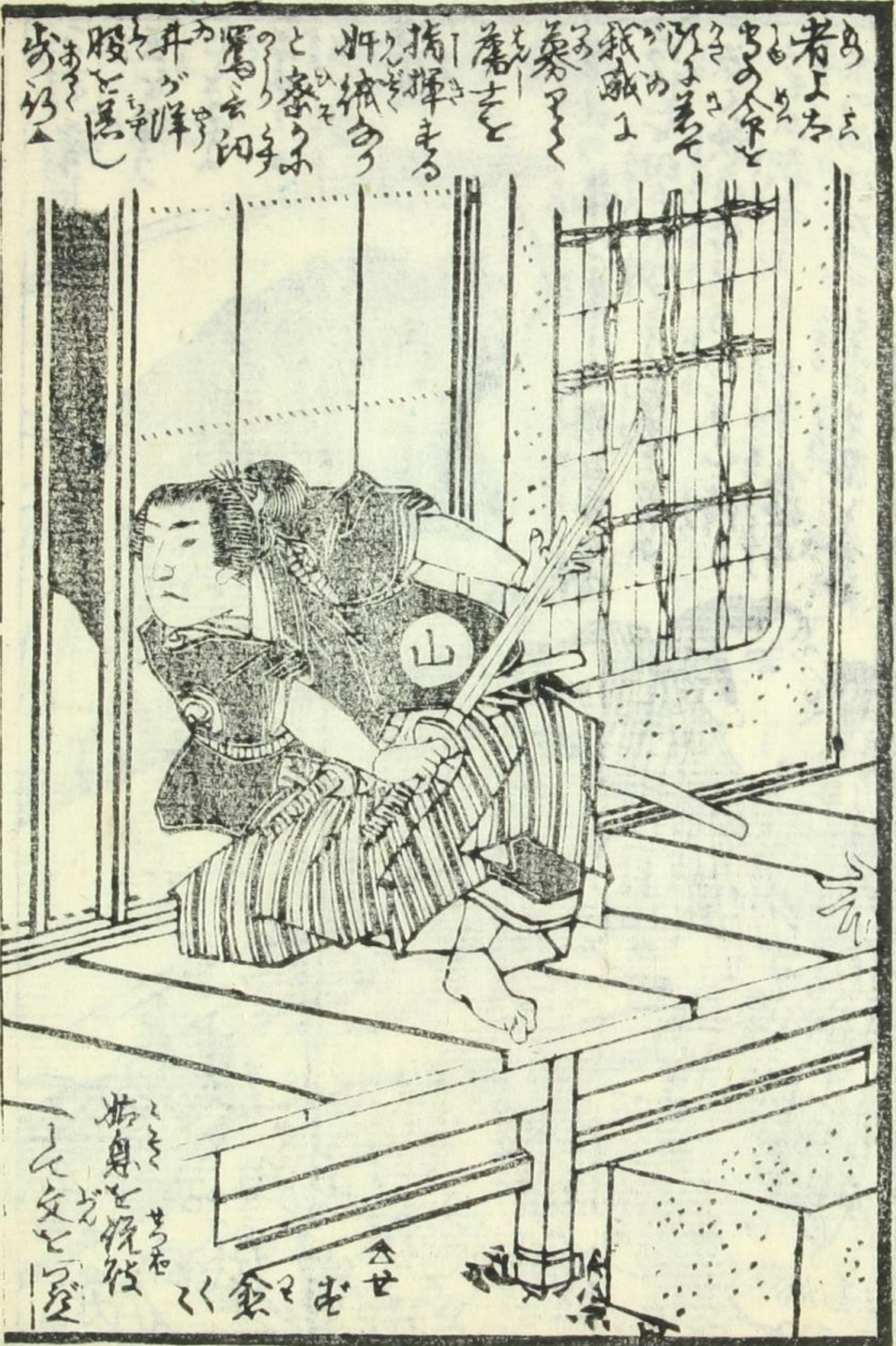
秋月藩瀬直久

秋月藩戸原某

冬楓月夕祭初編上

假名垣魯文聞
雜賀柳香著

此は復讐の野蠻世の遺習よりて最中忠むべし戦いむべき
 急なり然れども四幕の初世に復讐者忠と帯人成ひの後と
 異びあやまらば一意は復讐者の親子兄弟の長よりさる可らざる
 者と妄想し其悪習を廃絶する能はざるの事ありて官舎にも
 復讐の事を見れば公元の服布て忠を以てし忠臣孝子の
 然とるまより終極とすまはす下危害と良民は彼むしむるま
 りしが徳川氏由復讐と禁しこれとその忠孝の至情の夜ドした
 今や人文開け智識日進歩との悪習を教養さす一が本年ふつ







つきみていと静蕭ある機
 下と継柄子も持来りし
 何ぞとて静とて
 えて各自を
 かりとての直理が
 居るとは
 した極
 例の透
 深きては花の光り
 闇と照らさる
 矢のよきとはは
 神あがぬ身の印舟直理の向川夜舟
 後

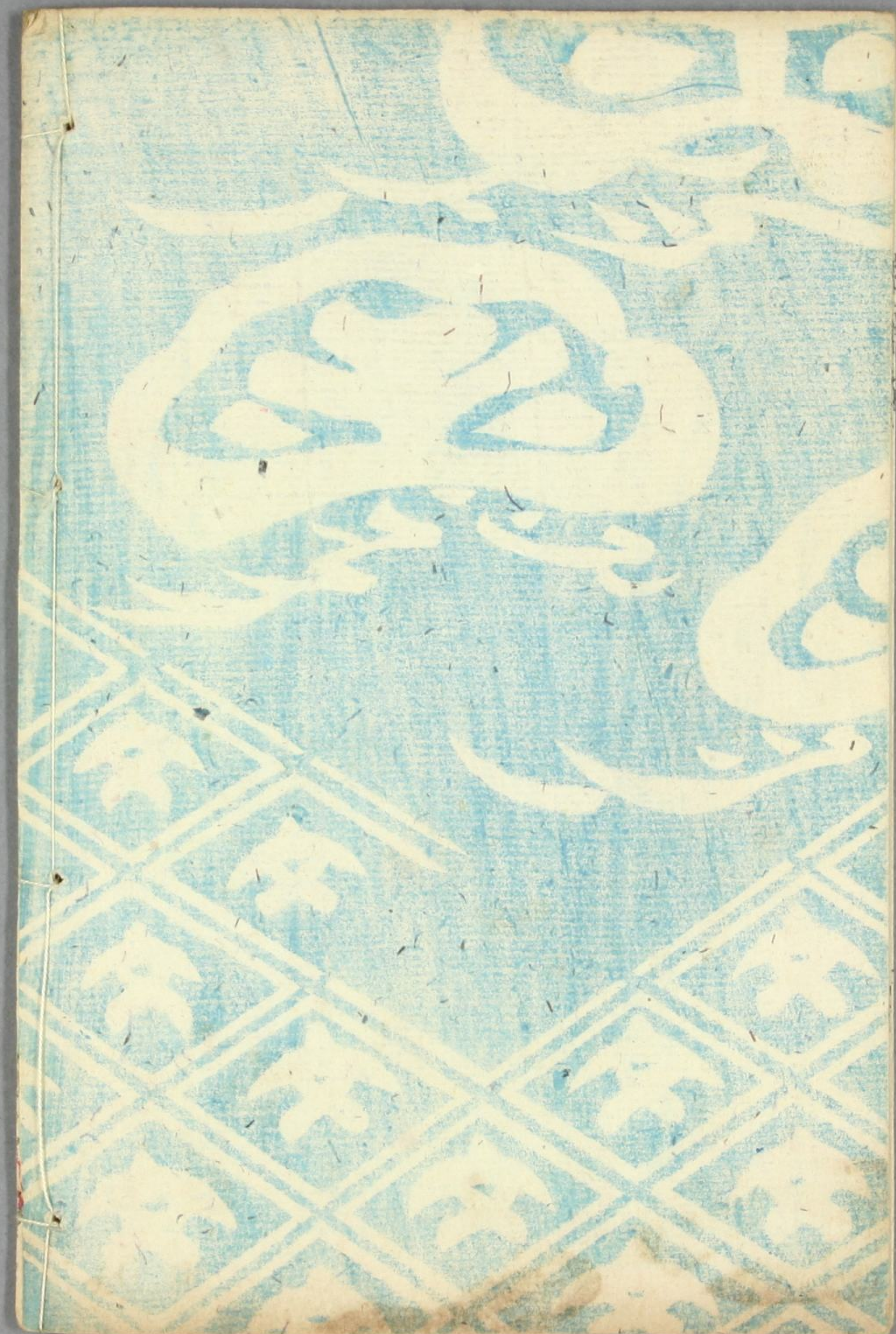
源
 秘
 密
 入
 開
 入

官 朝鮮
 許 牛肉丸
 大色代下五
 中色代下五
 小色代下五

官 天泰丸
 包代下五
 包代下五
 包代下五

此天泰丸は...
 一切の...
 大坂府平民
 芝区日蔭町三丁目一番地寄留
 編輯人 雜賀豊太朗

文 錦繪問屋
 出役御前明王二年青共日
 金松堂
 出役人 辻問屋 取



雜賀柳香著



金松堂壽梓

下

35

30

25

20



冬
初
月
夕
榮

初
盆

中
盆

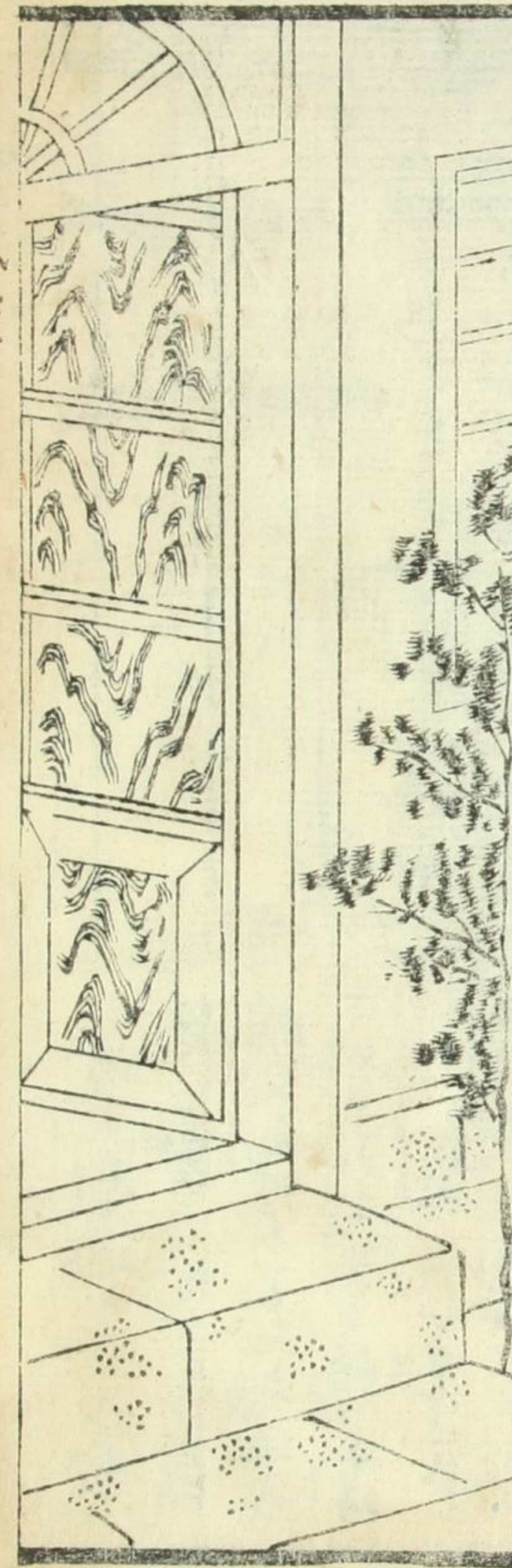


辻
文
様

仮
名
詞
園
雜
賀
著
梅
畫
画

冬、楓、月、夕、榮、初、編、下

中の巻より 最中の葉月中旬学校生徒はぐらち集ひ想ふ間の生活
及事と論ト各席の動靜を記しと喋くとわらわら出たりせし氣分
雜談此紙に中を中を印しその時を亡お親が齒の敵固ゆきよ屋
竟と列居る生徒を思ひ出す乳放しぬ葉が申さぬゆめと





治は憂遊するとの意
 榮と生ぜーあらんは言ひ
 我父直理がどなた守の
 命とらあうら類う小洋
 法と是とほ
 て一葉の
 方向と有恩
 慮せむは
 ありけひゆ家遊
 小園家と原
 あり
 後迄は晴敷さほ



つきのまきと
 尚書幕府
 を改と返上ほして
 室内の形勢一變せし
 ゑるがう方今のま外
 身と親し我が神國の藩親と
 末札兄弟の心遠き由空しくあり
 つる遠懐さとは皆外矣と瞞着
 さま端と賣て我を忘るく好境要

あつて父の横死
 云そのがよ及びいあえんま
 つけをも父と解し一有表の人とを
 感心せり遠き後わい西の乃次へ



大あつち
 ちんちん
 馬のこゝろを
 遠くまで
 送るは
 遠くまで
 送るは

攘夷の後と先祖
 ある河上一座の顔見
 合を何と云へる者もあは
 うちふ一の源流久が
 弟もて道も助とのる
 者希とをりて叔父やう「お弟
 どの今の云葉実よ我率感心
 せう菊も我邦の連綿する神
 物よりのあがら外夫が麻鬼刺し
 眩目さき合月ひの影
 法は皆洋式とらう
 来て見るものさした

来て見るものさした



懐く
 懐く
 懐く

他席のへき

又向舟の遠みと
 糸繰りのさおあはら

の者の平
 考用化
 紫くる又
 後出
 せは

冬極下

今宵弟氏が何
 とそそり父が汚名と
 雪ぐみ足はうその
 真むと関とへ是下
 又実と夕とち活一
 やさん丹もさつろ
 美足下が父直理
 どのと晴敷るせー
 その人そ移り先
 道の助が兄連文
 みていぞと

対ひけし
 一のちがことと
 容易あるね
 晴敷と足下
 の足がせしと
 りんは楯の
 あんよ迂
 潤ある
 鳴る

制智河の
 つま一ヤ其も武士
 六
 止むらぐ
 よろんと態よ
 ぬけさんと

証控と
 りんは楯の
 車火南
 即丹と切
 方とた刀の
 又と缺ら



修るみ
 叔と
 大希へ
 猶も
 晴敷
 まりあ
 まりあ
 釋成
 口まの
 者へ道
 助小

漢書
 兵書
 慕

今宵弟氏
 とそそり父
 雪ぐみ足は
 真むと関と
 又実と夕と
 やさん丹も
 美足下が父
 どのと晴敷
 その人そ移
 道の助が兄
 みていぞと

対ひけし
 一のちがこ
 容易あるね
 晴敷と足下
 の足がせし
 りんは楯の
 あんよ迂
 潤ある
 鳴る

制智河の
 つま一ヤ其
 六
 止むらぐ
 よろんと態
 ぬけさんと

証控と
 りんは楯の
 車火南
 即丹と切
 方とた刀の
 又と缺ら

又と風切下

四



秋の月夜士の落くも清
 世の闇明を知る所なき
 家好地 方 素 高 之 勢 力 大

つき 名称
 も 後 とも あり
 りて 今 まで 絶え ぬ
 方 向 を 定 む 中 小

夏草と懐あつと
 止まざるまで
 そとが 中
 みも一の瀬
 萩原を原
 ひとりの者な疾
 とも世は 河津
 ねまを 頼國を 後を 述ん
 疾く 舟と 舟を 扱し 後
 草の 際を 横を 舟の 方 向 を 定
 めて 舟の 又 速 温よけとを 活せし
 上 原 高 之 勢 力 大



文 柄 不 下

清 慧 所
 ま せ ぬ 家

御 休 所

土 師 八 兵 衛
 頼 國 の 後
 さ め せ 枕 中
 宮 侍 奉 る 助 へ
 ま せ ぬ 世 の
 六 十 七 城
 隊 の 兵

假名垣魯文閣

〇記者田中初編と冊ハ

西儒多慕の脚も亦

か漢業のりり生

世に於て

いよいよ

が此より

来々の報

活希が病死の懸

昇号の俾りやその中

記者柳香と激し

直

編の

換

月一

の二

板

を

を

を

を

求

雜賀柳香著 梅堂國政画



官 朝鮮
許 名 牛 肉 丸
大包 八下 五 見 九
小包 代 十 五 正 屋

官 天 泰 丸
小包 代 五 厚 書

此丸は朝鮮の牛肉を丸にしたもので、味は辛く、消化がよい。...

文 錦 繪 問 屋
出 版 者 錦 繪 問 屋
金 松 堂 出 版

大坂府平民 芝区日蔭町三丁目 番地 寄留
編輯人 雜賀豊太郎

010190513594





十三坪の仇嵐
世間堀の
韓紅
冬楓
月夕
榮初編

梅堂國政画

元田影栄

中

35

30

25

20



初編
月夕火床

初編

下の巻

魯文堂

柳亭著

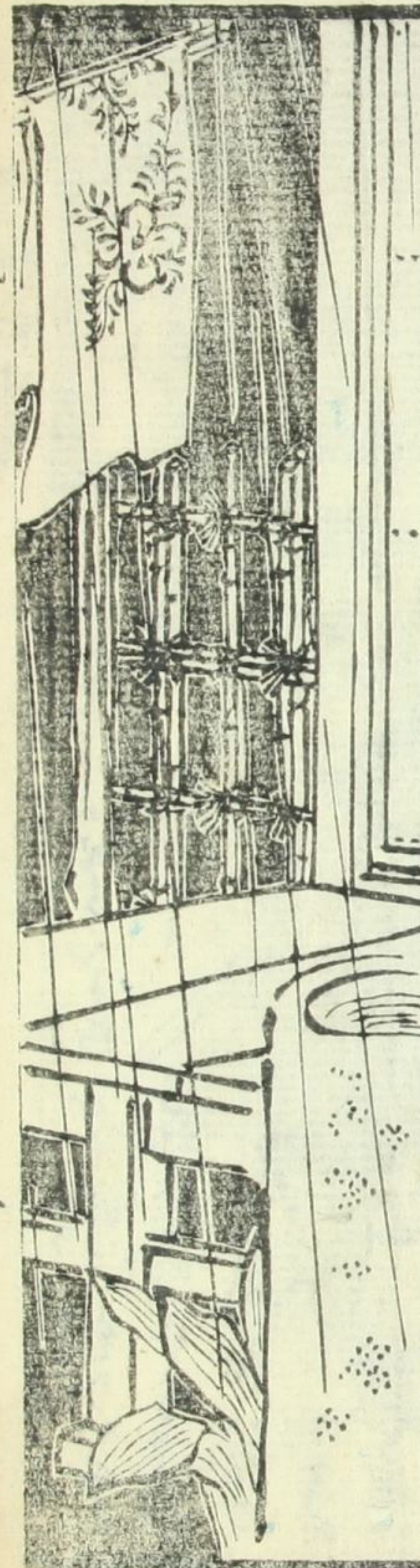
五受画

辻とこ

たん

冬楓月夕火床初編中

上の巻つき 肝臓紀よの巻とのふ足と柳と漸久甚不常ま獲き刻
紀る直理が有先下刀切あらしる直久と足よと漸例直理の候
ある鏡刀とのり久と又切付る直久が右刀先まるどくたりの有より
七八寸と切さげらるる直久と云さぬ例るところと付入ッて胸元へさ
費さし一刀小を残やる印并直理の教を息の経よりなれこの相書次







年々
 若狭の
 石名の手紙
 雅とる

達せられ
 中
 二



廢藩置縣の令秋月
 達一衆庶駭くの因

幕府と當むべしと命令

寺へ葬むる遊務怠

とりまじりが誰い

となく白弁直

理と踏殺せし

干城海の壯士軍

相違ふと巷

徳らぐあるふ

つし六弟の幼

むらさねね心あるま由

徳とらち兼政台田

臆叟も直理が横

死と深く悔みま

京都の石守る人由

六この進

甲州文書小由

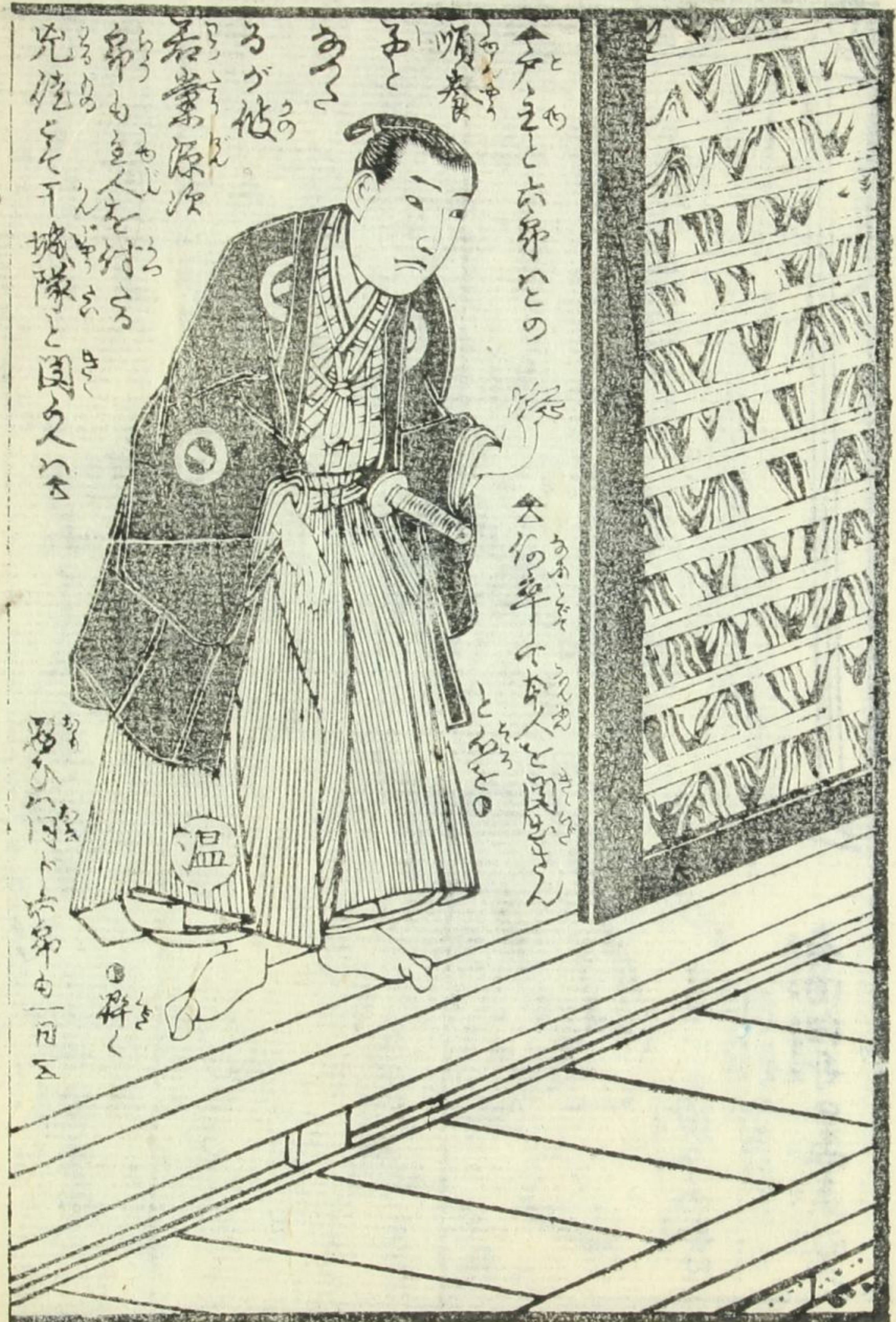
疾くせぬひ

疾く吟

味して充

要を處

刑徒



又の振和申

つき入塾まる者稀ある由
金の命は倉方より一箇申の仕
等ハ皆との後へ



金匠ガ

九

六の申由
源治身
がめめ
小安ふ
もと
此のの
授へる
し
由
夏
秋
下の

官 朝鮮
許 牛肉丸
名法
大包代下五受
中包代十受五屋
小包代六受五屋

官 天泰丸
許
なんじきの菜
包代六受五屋

此天泰丸は素身一たんじきのぞん
そくのらうまのうのあましくは
のまのんのまをまのうのまのん
まのんのまのんのまのんのまのん
一切のまのんのまのんのまのんの
まのんのまのんのまのんのまのん

文 錦繪問屋

金松堂

出板入

江崎文取

出板街福明堂 辛三月廿六日

大坂府平民 芝田町三丁目一番地寄留
編輯人 雜賀豊太朗

010190513586



十三年の仇蔵

冬楓月集

サ間組の韓紅

猫又道人閑

彩霞園著

國政民園

板元金巻

初編三舟
二編定日
三編...

